

探訪 北の風景 ⑦

タンチョウとSLの茅沼駅 釧路管内標茶町

青木和弘

SL冬の湿原号がJR釧網線の釧路・標茶間を運行しているので、タンチョウが飛来する茅沼(かやぬま)駅で待ち受けることにした。

標茶町史などによると、タンチョウが近くに生息する駅として茅沼駅が知られるようになったのは昭和30年代からだといふ。だが、1962(昭和37)年に178羽確認されていたタンチョウが、冷害による餌不足で64年には150羽にまで減り、畑を荒らすようになった。心を痛めていた駅長の元に、人間とタンチョウが共生するための餌場を作ろうと、釧路鉄道管理局の有志らからカンパが届き、駅裏の農家の協力で餌場を設け、給餌を始

めた。すると数日後には餌付けに成功する。その後、支援の輪は、標茶町や釧路地方教育局、これを知った人たちへと大きく広がっていったという。翌年から、駅の近くにタンチョウが飛来すると列車に合図を送り、車掌が車内放送でタンチョウの到来を紹介して一気に評判になった。

実は、タンチョウは明治になって乱獲され、大正時代に絶滅したと考えられていた。ところが1924年(大正13)年、釧路湿原の奥地で数十羽のタンチョウが見つかり保護が始まる。1952(昭和27)年に当時の阿寒町(現釧路市)と鶴居村で給餌に成功し、少しずつ生息数が回復していった。日本野鳥の会によると、現在のタンチョウの生息数は約1800羽、約400つがい営巣しているという。茅沼駅の給餌は代々の駅員に引き継がれ、86年に無人駅になっても住民たちによって2016年までつづけられてきた。

SL冬の湿原号は、2000(平成12)年1月から運行する臨時列車だ。煙をモクモクと上げて走る蒸気機関車は生き物のようで、冬の湿原の風物詩でもある。釧路・標茶間の所要時間は1時間30分。タンチョウやキタキツネ、エゾシカなどによく遭遇する。

茅沼駅にはいまもタンチョウが飛来し、周辺の道路はもちろん、駅のホームや線路を悠々と歩きまわる。遭遇したディーゼル車が一時停止して通



釧路湿原をゆったり流れる釧路川。茅沼駅裏側の道路の北側にも釧路川のカヌーの発着場が整備されている。写真は標茶町の二本松橋付近の釧路川

過を待つほほえましい光景も見られる。この日は鉄道写真マニアが、あちこちにカメラを据えて待ち構えていた。私は、駅裏の畑の脇から、こぢんまりした駅舎とSLをとらえようと到着を待った。畑にタンチョウが数羽居るので、列車が迫ったときに、ファインダーの視野に居てくれることを願った。チャンスは1回だけ。タンチョウは運任せである。

「冬の湿原号」をけん引する道内唯一の現役SL「CH1-171」は標茶町と縁の深い車両である。1940(昭和15)年に川崎車両兵庫工場で製造されたのだから年齢は80歳。名古屋機関区などで使われた後、42年に北海道の深川機関区に配属となり、朱鞠内、標茶、木古内、長万部、釧路





茅沼駅はラムサール条約登録湿地である釧路湿原北東部の、コッタ口湿原の農村にある。SL冬の湿原号は1月～2月の期間限定列車。客車のレトロなたたずまいも人気で、本年は運行20周年となった



標茶町は温泉に恵まれた土地だ。標茶温泉「味幸園」は茅沼駅から9kmほど北にある。ツルツルする褐色のモール温泉で源泉掛け流しの実に良質な湯だ。現在は日帰りだけの営業だが、温泉通の常連客が「湯の質は道東一番」と誇るだけある、ぜひお勧めの温泉である

の各機関区で使用された。75年に廃車になり、標茶町の桜町児童公園に静態保存されていたが、95年にJR北海道に返還され、現役への復元工事が施されることになった。

1999年に「SLすずらん号」として留萌本線（深川・留萌間）で営業運転を始め、その後、「SLふらの・びえい号」「SL函館大沼号」などとして活躍し、ほかにさまざまな臨時記念列車になって登場した。ボイラー保護のためディーゼル機関車を補機として従えて運行していたが、「SL冬の湿原号」は補機を連結することがほとんどないようだ。

SLの寿命の長さに驚くと同時に、人生100年時代、まだまだ元気でいてほしいと、つい蒸気機関車に情がわいてしまった。